

今や美術品 染付古便器



小判型大便器(瀬戸) 菊と槿(むくげ)。明治後期。高さ29.3センチ、長径53.2センチ、短径26.6センチ。

使用者が見ることでできない、金隠しの外側にまで描きこまれている。この形の便器は横向きに置かれることが多く、金隠しを入り口側に向けて置くこともあった。



古便器とは水洗式以前のトイレ用に作られた便器のこと。明治24年、愛知と岐阜で起きた濃尾大地震から、木製便器を模した陶器の便器が大量に作られるようになる。陶器の素地(きじ)を白い泥で覆い、青に発色する呉須(ごす=コバルト)で花鳥を描く。

326点も収集した人もいる

染付古便器を三二六点も収集した人がいる。古流松應会と言う生け花の副家元さん。水洗便所しか知らない世代だそうで、美しい絵付けに感動したらしい。今は庭に置いたり倉庫まで作ってびっしり。絵柄の八割が牡丹に鳥(雀)だそうである。

トイレ、厠(かわや)は、応接室だと美術史の先生が言う。客を惹きつけ、勇気づけ、元気づけるため、染付古便器を設置している。見えないところまで 全方位の装飾」がなされたと説く。

陶器から磁器へ 衛生観念の向上で普及も

どこだったのか。少年の日、下のような朝顔に小用をたした、かすかな記憶がある。これは染付古便器と言いい、粋(いき)な芸術品とされている。常滑市にあるINAXライブミュージアムで、染付古便器の粋・清らかさの考察」という企画展が開かれていた。



磁器製の朝顔型小便器。朝顔の花が咲いたときのようだから、朝顔型という。牡丹の染付けが多い。高さ65.3センチ。

末広クラブ・逆井漫歩119 平成20年7月